

# 「地産地消の村に」

## 農と人とくらし研究センター

### 岡谷で設立イベント



これからの農村のあり方を考えた「農と人とくらし研究センター」の設立記念イベント

農村生活の変遷などを研究している岡谷市川岸中一のNPO法人「農と人とくらし研究センター」(片倉和人代表)は十四日、設立記念イベント「岡谷から発信する「農と人とくらしのこれから」を同所で開いた。地元住民をはじめ全国各地から集まった会員の研究者ら約四十人を前に、地元三沢区の山之内寛区長が遊休耕地の活用を軸とした農村のあり方を提言。「昔のような地産地消の村にするのが私の今の夢」と語った。(斎藤康史)

同センターは、農林水産省の外郭団体で農村の生活改善について研究していた片倉代表が、昨年九月に郷里の岡谷市に戻って設立。現在は全国各地の研究者や元生活改善普及員ら二十五人で構成し、農村生活の価値を問い直す研究

事業などを行っている。今年二月にNPO法人になり、地域住民らに存在を知ってもらおうとイベントを開いた。

「三十年後の自給自足の村を目指して」と題した講演で、山之内区長は「区内には遊休耕地がたくさんあり、もったいないとずっと思っていた」と話した。自給率の低下や外国製品への不信感を挙げて自給自足の必要性を強調。夢への第一歩として、同センターと連携した農業教室などの構想を披露した。片倉代表は「夢の実践に向けて一緒に歩いていきたい」と応えた。

また、これまでの事業成果として、同センターが国際協力機構(JICA)から受け入れたメキシコ人研修生のダブル・トリニダードさん(23)が、片倉代表らを講師に三沢区の生活環境を調査して改善点をまとめた「生活環境点検マップ」を発表。ダブルさん「休耕田の多さが気になった」と話した。同センターは活動を支える

会員を広く募っている。問い合わせは同センターのホームページ(Urlp: /www.nrci.jp)へ。

2008年6月15日(日)

長野日報

2008年6月15日

岡谷市民新聞

## 農と人とくらし研究センター NPO法人の活動スタート

「農と人とくらし研  
究センター」(片倉和

人代表)の設立イベン  
トが十四日、川岸三沢  
の同所で行われ、NPO  
法人としての活動を



発表するメキシコのダビッドさん(左)

スタートさせた。本年  
度同会は、有休農地利  
用など市民とタイアッ  
プした実践活動を計画  
している。

同研究センターは、  
川岸出身で京大農学部  
大学院博士課程修了の  
片倉代表が、農村生活  
に関する調査研究など  
を行う施設として昨年  
九月に立ち上げた。海  
外から研修生を受け入  
れる活動を続けてお

り、二月にNPO法人  
として認証された。

会員や地元住民ら約  
四十人が出席して開か  
れた設立イベントで  
は、メキシコのJ・C  
A 研修生、ダビッド・  
トリニダードさん(三巴  
が三沢地区の生活環境  
点検マップを発表。実  
際に同区内を見て歩い  
た結果から、田んぼの  
多くが休耕田になって  
いる点を指摘、使われ  
ていない土地の利用  
や、奇麗な水の栽培へ  
の利用、道路沿いに道  
標があればと提案し  
た。

山之内寛三沢区長  
は、「休耕田を使って  
区民農園を開いたり、  
山羊を飼うなど、自給  
自足、地産地消の村が  
できたら」との夢を語  
った。片倉代表も、  
「棚田があった百年前  
の地図が未来のビジョ  
ン。これに向かって夢  
の実現を目指してい  
きたい」と話した。